

身代わり男装王女は、  
一途な騎士の手で淫らに健気に花開く

### プロローグ

「マティス？ どうしっ……」

王女、ローテローゼの言葉は、目の前の男——マティスの唇で塞がれた。

マティスはローテローゼを抱きしめると、そのまま舌先でローテローゼの唇をちろちろとくすぐり、わずかに開いた隙間から舌を差し込む。

「ん、ん、んっ……」

抵抗したのは一瞬だけで、すぐにローテローゼはマティスの動きに合わせて。

ゆっくり唇が離れたかと思うと、マティスの舌が首筋をゆっくりなぞる。ゆるやかに漂い出した甘い空気に、ローテローゼの心臓が甘くトクンと跳ねた。

「……あ、マティス、まだ、ダメよ……」

いつものように鎖骨の下を強く吸い上げたマティスが、俺の姫、と小さく呟く。

「まだダメ、と、言いながら甘い吐息が漏れているようですが？」

意地悪く問われると、さらにローテローゼの瞳が潤み、胸が甘く疼く。

マティスは、ローテローゼの乳兄弟だ。

そして、兄であり、国王であるベルナルを守る王宮の護衛騎士である。しかし今は、ローテローゼの夫でもある。

——いったいどうしてこのような関係に？

「姫？」

視線を移した先には繊細な装飾を施した飾り窓があった。奥には薔薇が咲き誇っている。ついでこの前まで、ローテローゼは身代わりの国王としてこの王国で走り回っていたのだ——

## 第一章 国王の不在

大陸南端に位置するノワゼット王国の王都、ノワゼット。

大通りから小道の隅っこ、或いは国境の山脈から港まで、いたるところに薔薇が年中咲き誇っている。当然のように王家の紋章も薔薇、国花も薔薇、国歌も薔薇を称え、国民がもつとも愛している花も当然薔薇で、国民は薔薇を育てることを推奨されている。

もちろん輸出品の際たるものも薔薇。

とにかく薔薇尽くしの国であるがゆえに、近隣諸国はノワゼット王国を『薔薇国』と呼ぶ。

その年は、例年以上に薔薇が咲き誇っていた。民が競うように願うようにして薔薇をせっせと育てたのには理由があった。

彼らが愛してやまない国王夫妻に、子供ができたのだ。

「無事にお生まれになったぞ」

その知らせを受けた民は、薔薇で大きな花束やオブジェをいくつも作ってお祝いした。民の喜びの声と薔薇の芳香は、王宮の奥深くにいる王妃の元にも届いた。

嗅ぎなれた薔薇の香りに包まれ、王妃は微笑んだ。安堵の笑みだ。

「ああ、薔薇の香りは素晴らしい。気持ちが安らぐわ」

「我が子らも、薔薇のように育ってほしいものだ」

王も、愛しい妃と子らに目を細めた。

華奢で可憐な王妃が産んだ子は、男女の双子だった。

ほどなくお披露目された双子は、薔薇の紋章つきのカパーオール、薔薇の紋章付きのスタイをして、薔薇の紋章付きの哺乳瓶を持たされ、かぐわしいほどの美しさだった。

この国では男女の別なしに生まれた順で、王の子に王位継承権が与えられる。

ゆえに、継承権第一位は少し先に生まれた男の子に与えられた。ベルナル・セトウトワ・ノワゼットと名付けられたその子は白い肌に金の髪、青にも緑にも見える綺麗な碧眼で、将来さぞ美しい王子になるだろうと思われた。

次いで生まれた女の子。名を、ローテローゼ・メリアメン・ノワゼットという。彼女もまた白い肌に明るいふわふわの金髪、兄と同じく青にも緑にも見える碧眼、将来とんでもない美女になるだろうと予感させるに十分な目鼻立ちだった。

「美しく、清く、正しく、賢く、薔薇のように誇り高くあれ。薔薇を慈しみ育てるように、民を愛するのだ。豊かな薔薇国を保て」

国王夫妻は、そう願いながら二人の子に惜しみない愛情を注いだ。

——そんな彼らが五歳になった時、重臣の子が二人、王宮に召し上げられた。

銀の髪に黒い瞳の、姫と王子よりも五歳年上の少年、マティス・メルクリウス・ギガンティア。剣を王族お抱え剣術指南役の父に習う彼は、読み書きも算盤も堪能だった。

もう一人は、双子と同じ年の女の子で、この国の元老院議長ポンペイウスの孫娘アナスタシアだ。まっすぐな黒髪に涼やかな目元が印象的な美少女は、王女であるローテローゼの遊び相手としてつけられたのだが——ベルナル王子は、一目で彼女に恋に落ちた。

「レディ、ぼくとけっこんしてください」

庭に咲いている赤い薔薇を礼儀正しく差し出されたアナスタシアは、微笑んでその薔薇を受け取った。

「ベルナルさまが立派な国王になったら、そのとき考えるわ」

この日から、ベルナルが猛然と勉強を始めたのは言うまでもない。

「ね、男って簡単なのよ、姫さま」

ウインクしたアナスタシアに、ローテローゼは拍手を送り、マティスは苦い顔つきになった。

悪い子ではないが、頭がややシンブルにできている王子。

悪女っぽい雰囲気、アナスタシア。

そんな二人を、憧れの目で見つめる姫。

「ああ、将来、面倒なことになりそう……」

このマティスの眩きは、やがて現実のものとなった。

それから十年以上の月日が流れ——双子がこの国での成人である十八歳となった日のこと。

それまで穏やかだった薔薇王国に、咲き乱れる薔薇が全部吹っ飛びそうなほどの椿事が出来た。

「大変です。ベルナル陛下が、アナスタシアと御駆け落ちにございます！」

先王の私室に、悲痛な老人——ポンペイウスの声が響いた。

「おかけおち……？ お、かけおち？ 駆け落ち！」

先王の執務室には、ベルナルの姿が見えないため、城の内外を捜していた者たちが集っていた。宰相や、ベルナルの護衛であるマティス、そしてローテローゼもその一人だった。

ローテローゼは、いきなりの言葉に困惑しつつ、隣のマティスを見る。

今朝から不在のベルナルに対し、常に彼の側にいたマティスが混乱しているのを知っていたからだ。今も、城下まで行っていたのだから何かと不安がっているとは思っていたけど……まさか駆け落ちだなんて！

（ついこの前、王座を継いだばかりだから何かと不安がっているとは思っていたけど……まさか駆け落ちだなんて！）

今から数か月前、ベルナルは急遽王位を継ぐことになった。

先王が薔薇の手入れの最中に暗殺者に襲われ、瀕死の重傷を負ったためだ。命は取り留めたが、

とても玉座に座れる状況ではない。そのため、王位をベルナルルに譲ったのだ。

そこで王子の護衛であり王立騎士のマティスは王と王妹おうまいの傍に、アナスタシアはローテローゼ付き侍女兼護衛としてその傍にいたことになったはずだったが――

先王はぜいぜいと肩で息をしてから、ポンペイウスに聞いた。

「……元老院議長、説明を」

「今申し上げた通りでございます。陛下と我が孫娘が、手に手を取って御駆け落ちをいたしました。結婚を許してくれないから逃げますと、書簡が……」

絨毯に額をこすりつけんばかりにして泣いている老翁の震える手には、一枚の書簡が握られている。

「なんとということ……」

書簡に目を通した先王は唸り、宰相は思わず窓の外へ視線を投げた。

ベルナルルが国王になることはすでに国民に広く通達され、数日後には戴冠式が行われる予定だ。今更、ナシになりました、とは言えない。

さらにその理由が、国王の駆け落ちだなどというのは論外である。

（お兄さまは何を考えていらっしやるの……!?!）

ローテローゼもまさかの事態に、無言のままである。

シン、と静まり返った部屋で、宰相の視線がローテローゼの顔で止まった。

「ローテローゼさま……」

「は？」

「かくなるうえは、身代わりを！」

乱心したかと思えるほどの提案に、ローテローゼは勢いよく首を横に振る。

「無理です、無理よ、宰相！」

しかし、宰相は譲らなかつた。

メガネの奥の目をギラリと光らせて、ローテローゼに詰め寄る。

「大丈夫です。陛下とローテローゼさまは瓜二つ、遠目で見ればどちらであるかなどわかりません。せめて戴冠式の間だけでも！ マティス、どうだ？」

突然そう言われたマティスが目を瞬かせる。

「……そんなことを……ローテローゼさまには……」

グッと拳を握り締めた姿に、ローテローゼはハッとした。

王宮騎士であるマティスからしてみれば、ベルナルルの駆け落ちは大失態だ。

詳しく聞くと、ベルナルルがわざわざマティスを城から離れた場所へ使いに出して、その隙をついて逃亡したそうだが、生真面目なマティスが責任を感じているのは明らかだ。さらにその尻ぬぐいをローテローゼに押し付けたいと思っっているはずがない。

（何か、他にいい案はないかしら……）

しかし、これ以上の名案は浮かばない。

それに、マティスは、ベルナルルの傍にいてくれないと困る。

これまでずっとマティスは、奔放なベルナルを陰ひなたなく支えてくれた。ローテローゼとも友人としてずっと一緒に過ごしてくれた。ベルナルと駆け落ちをしたアナスタシアも同じだ。(二人とも、わたしにとっては大切な友人よ……)

今、自分が身代わりになることで、国民や周辺諸国を混乱させることなく、全員が元に戻れるなら――

そこまで考えてから、ローテローゼはマティスの手の甲にそっと触れた。指先に微かな温もりを感じる。同時に、マティスがローテローゼを見る。

さらさらとした銀の髪と、黒い瞳がこちらを見つめている。

(うん、これが最善だわ、きつと……)

ローテローゼはすうっと小さく息を吸った。

「……わたしが身代わりを務めましょう」

「ローテローゼさま！」

目を見開いたマティスが叫んだが、ローテローゼは短く首を横に振った。

「兄の不始末ですもの。……国民のみなさまにも周辺諸国にも、この緊急事態を知らせるわけにはいきません。そうでしょうか？ お父さま」

馬鹿で無茶なことを言っていると自分でも思いつつ、ローテローゼの唇はきちんと動いた。

「……やむを得まい。励め」

「はー」

そうであれば、と宰相たちが立ち上がる。

混乱や噂がむやみに広まらないようにするため、この室内にいた者たちだけで、この『身代わり』を行うこととなった。

しかしいくら双子で顔立ちが瓜二つとはいえ、やはり男と女である。幼き頃は入れ替わって周りを驚かせて遊んでいたものの、十代後半に入ればそれなりに男女差がある。

喉元を隠すために襟は高いものを。胸元や肩幅を誤魔化すためにゆったりとしたシルエットの上着を。剣だがないことを隠すために手袋を……と、宰相とマティスがあちこち走り回り、衣装を集めることになった。

そんな騒ぎを聞きながら、ローテローゼはベルナルの執務室に向かった。

重厚な黒い執務机と黒の革張りの椅子は無機質だが、曲線と繊細な装飾が美しい。それらの調度はローテローゼも同じものを持っている。ただ、カーテンや絨毯の色がローテローゼの部屋は白やピンクなのに対し、兄の部屋は落ち着いた緑系統で統一されていた。

「お兄さま、早く帰ってきてくださいね……どこに行ってしまったのかしら」

そう呟いて、兄の残っていた書類を見つめる。

そもそも、急遽玉座に座ることになった兄を補佐するために、ここ数か月は、ローテローゼもできる限りの執務を一緒に行っていた。そのおかげで書類に記載された内容の大半は理解できる。

しかしその裁可となると、話が変わってくる。

サインをして王の印を捺す。そこには責任が伴う。

多少の会議や会食なら兄を真似て振舞うこともそれなりにできるだろうが、外交のような大規模なものになると自信がない。そんな事態にならないように願うばかりだった。

「お二人の行方を追わせていますが、未だ判然と致しません」

そう言って、腕に何やら大量の布を携えたマティスがやってきた。騎士の制服やマントを脱ぎ、シャツとトラウザーズに腰には細身の剣という、いつも国王の警護をするときの格好になっている。速やかに緘口令がしかれたため、王宮内の一部にしかベルナルの失踪は知られていない。

だが、宮廷騎士であるマティスが国王の傍を離れているのは不自然であるため、大至急着替えさせられたという。

マティスの訪れに、ローテローゼは表情をほころばせた。

しかし、マティスはその場に跪くと沈鬱な表情を浮かべた。

「ローテローゼさま、先ほどは庇っていただいて申し訳ございませんでした」

その言葉に、慌ててローテローゼは立ち上がる。

「いいえ、勝手にいなくなつたお兄さまが悪いのですもの。わたしも王妹としてやるべきことをやらなくてはいけないわ」

はい、と、マティスが静かに頷く。立つてほしい、と思いつつローテローゼはマティスの手の中の布の山を指した。

「ところで……腕に抱えているそれは？」

マティスは申し訳なさそうに微笑んだ。

「ベルナルさまのお衣装です。袖や丈を、ローテローゼさまに合わせて直してもらう必要がありますから、一度採寸をと思ひまして」

そう言って、マティスがいくつかの衣装を持って立ち上がる。そして籠に選り分けると、上着を一枚広げてみせた。ローテローゼは、上着を広げているマティスの前に立つ。

そしてすぐに困惑した表情になった。

「あの、マティス」

「はい？」

「ドレスを脱いで、バツスルも外して、コルセットも外さないとサイズは測れないわ」

あああ、と、マティスが呟いた。

「で、では……恐れながら一度、ドレスを脱いでいただけますでしょうか」

（そうなつてしまうわよね!?)

直截な物言いに、ローテローゼの顔が瞬時に真っ赤になった。視線がおろおろと泳ぐ。だが、ローテローゼはすぐに小さく頷いた。

「わ、わかったわ、緊急事態だものね。一度自分の部屋でコルセットを外して部屋着に着替えてくるから、ここで待っていてもらえる？」

そうしていつものようにメイドを呼んで部屋を出ようとすると、マティスが慌てたようにローテローゼの口を塞ぐ。

「ダメです。昼間にコルセットを外す理由がありません。不審がられます」

「あ……そうね……」

メイドたちには、まだこの騒動を伝えていない。

「それに、身代わりとはいえ国王陛下のお傍を離れるわけには参りません」

「え……それって、マティスが、いつでもどこでも、わたしについてくるということ？」

そうです、とマティスが頷き、ローテローゼはいろんな意味で絶句。

困った、と、二人して沈黙してしまった。日頃から着替えが趣味のような姫君であったなら、不自然な昼間の着替えもおかしくはないのだが、ローテローゼはそのようなタイプではない。

「うーん……ローテローゼさまの具合が悪いと言えば王宮の医官がすっ飛んでくるでしょうし……」

「かといって、本当のことは言えないわ……」

どうしたものか、と二人で思案する。

ローテローゼはマティスの持つている衣装に視線を落とした。

「あ、あの、服は……直さないと、ダメかしら？」

「おそらく……恐れながら、このままではぶかぶかでしょう。それに……」

こほん、と、マティスが咳払いをし、ローテローゼの胸元に視線を落とした。ローテローゼの胸は年齢としては盛り上がっているのだ、ものすごく。確かにこれではとても男性には見えないだろう。

「……布をきつく巻けば、潰れるのではないかしら」

そうやって布を持ってきたものの、問題が浮上した。

——誰がこれを巻くのか。

二人が硬直したまま、時間だけが過ぎていく。やはりせめて一人はメイドを巻き込んで——とローテローゼが提案しようとしたところで、マティスの手が肩に触れた。

振り向くと、彼の黒い瞳が決意をしたように光っていた。

「すまない、俺に任せてくれないか？」

最低限の敬語すらない言葉に、ローテローゼが目を見開く。

その物言いは、本当に幼い頃のようにだった。

「一緒に水浴びもしたし、風呂にも入った仲だ、失礼！」

そう言うと、マティスの手がローテローゼのドレスに回る。あれよあれよと言う間にドレスが脱がされ、コルセット姿になってしまった。思わずローテローゼが両手で体を覆うと、マティスは生真面目な声で言った。

「いいですか、姫。採寸と布を巻く練習のためですからね」

「わ、わかつてるわっ！」

そしてあとはコルセットの紐をほどくだけ——というところで、マティスが手を止めた。

「決してやましいものではないし、男女の不適切な接触でもありませんからね」

「わかつてるってばあ……」

呪文のように繰り返される言葉に、顔の熱を堪えて必死に頷く。それでも恥ずかしいものは、恥ずかしい。コルセットの紐が解かれる音が、やけに大きく聞こえた。

胸を留めていたものが緩み、ローテローゼが息を吐いた。

「ま、マティス、さ、はやく採寸を……お願いね」

「は、はい」

声がいかにひっくり返ってしまったが、そこは聞かなかったことにして、マティスが肩幅や袖丈、着丈などをきばきと測っていく。

手慣れたその様子に、ローテローゼは目を見開いた。

——うん。マティスはお兄さまの代わりをわたしにきちんと務めてほしいだけなんだわ。なのにわたしつてば恥ずかしかつてばかりで……しつかりしなくちゃ——

ローテローゼは息を吸い込み、平静を装って疑問を口にした。

「あの、マティス、騎士のあなたに、なぜそんなことができるの？」

「それは……見よう見真似です。母がお城でお針子をしていましたから」

「ああ、そうだったわね。お母さまはお元氣？」

「はい——おかげさまで。元王宮お針子の肩書きを活かして、王都で仕立て屋をしています」  
そんな会話をしつつ、一通りの採寸が終わった。

マティスが図や数字を描き、せつせと羽根ペンを走らせる。

その間に、ローテローゼはすすつと兄のクローゼットに近寄り、部屋着を取り出して袖を通した。コルセットを身に着けるのは、一人でもできないこともないが、今は一刻も早く肌を隠してしまいたい。マティスに裸を見られるのがこんなにも恥ずかしいとは、思いもよらなかった。

「……それにしてもぶかぶかね……」

袖も着丈も長すぎる。だらしないどころではなく、手が全く出てこない。袖を一度折ったくらいでは間に合わない。

「どうでしょう……」

その呟きに、何気なくローテローゼの方を見たマティスは、思わず唸った。

美少女が男物の服を着て無防備に立っている姿に、軽いめまいを覚えたのだ。

しかし、ローテローゼはその理由には気がつかず、こてりと首を横に倒した。

「マティス？」

「いえ、失礼しました。この盛装用の上着ですが、ボタンの位置を調整しただけでは間に合わないかもしれません」

「そうね……。じゃあ、後ろをピンで留めてみるのはどうかしら」

ベルナルが戻ってきて、衣装がすべてローテローゼのサイズになっていても仕方がない。

その提案に、マティスは頷いた。

「では、その部分が見えないよう、マントやローブの類を用意しましょう。たしか、古より王家に伝わる羽織物が蔵にあったはずですよ」

えーと、と、ローテローゼが眉間を指先でとんとんと叩く。

それから表情を苦笑に変えた。

「丈が床につくほど長くて、首回りには毛皮だったかしら、立派な飾りがついていたあれね？」

「はい、そうですね。すっぱりと体を覆うデザインです」  
「そうよね、と、ローテローゼが頷く。

「それなら不自然な体の線が隠せるわ」

「はい。それとセットの杖と、立派な王冠もありましたから、背丈も誤魔化せます」

その言葉に、ローテローゼはマントの見かけを思い出した。

本来は王の正装であったというそのマントは、城の大広間に掲げてある肖像画のいくつかに描かれている。王家の紋章が背中に大きく金糸で刺繍されていて豪華といえれば豪華ではあるが、若い王が着るにはデザインも歴史も重量も全てが重すぎる。

しかも、まるで鳥かごから首だけ出したような格好になるため、歴代の王族はそれを嫌がった。そのため、ここ数代の王はそのマントを着てはいなかったはずだ。

「待って。いきなり若い王が古式ゆかしい格好をしたんじゃ、おかしいわ。お父さまもおじいさまも、戴冠式でそんなものは着なかつたもの」

その言葉に、マティスも動きを止める。

「そう、ですねえ……」

うーん、と、二人して天井を睨む。ローテローゼは考えつつ口を開いた。

「ねえ、マティス……式典そのものを古式ゆかしい形にできないかしら？　そうすれば、わたしが古めかしい衣装を着ていても目立たないわ」

検討します、と、言いながらマティスが立ち上がる。

ほぼ同時に、扉が慌ただしくノックされた。

「ロ……いや、国王陛下、少しお話をよろしいでしょうか」

焦ったような声は、宰相のものだった。ローテローゼは今まで普通にマティスと部屋着姿で話していたことを思い出し、慌てて身を縮める。

マティスは慌ててローテローゼから視線を逸らし、「声だけで」と扉の向こうに囁いた。

そして、宰相と何やら話して、振り返る。

「ローテローゼさま、申し訳ございませんが、バルコニーからの国王陛下のお手振りをお願いしたいと宰相から申し出がございました」

「今から？」

ローテローゼは目を見開く。マティスがまた生真面目に頷いた。

「はい、民が陛下のお姿を一目見たいと集まっているそうです。ベルナルルさまは、一日に少なくとも三度はバルコニーに立っていらしたので、それがなくなると民が訝しがると……」

「一日に三度も!? お兄さまは目立ちたがり屋ですものね……」

国王になると決まってからの兄のはしゃぎようを思い出して、ローテローゼは苦笑する。

今度は、マティスが目を見開く番だった。

「陛下は、民がすこやかに暮らしているか、不都合はないかを見ている、と……」

ふふっ、とローテローゼが笑う。

「それも真実ではあるでしょうけれど、一部に過ぎないわ。お兄さまが真っ先に考えることは『お

れ、目立ってる？ かつこいいだろ？ どうよ？』なのですよ」

騙されないでね、と、ローテローゼは笑った。

それから覚悟を決めたように息を吐き出して、マティスを見つめる。

「さて……わたしは頑張つてバルコニーに立ちます。マティスは先ほどの儀式の件をよろしくね」  
がんばる、と、拳を握るローテローゼに、マティスは最敬礼を送った。

\*\*\*

「ええつと……これを、こうして……」

この国の貴族は、成人前に身分や男女を問わず、動きやすいようにズボンとシャツを着せられる。ローテローゼも幼い頃は兄と同じ格好をして、乗馬や自転車にも興じた。

「だから、一人で着られると思うんだけど……」

用意された上着の袖を折つたり、重たいブーツには詰め物をして履いてみたり——あれこれ工夫して身に着ける。しかし、困ったのが胸だった。

ジャケットの前が合わないのだ。

悩みに悩んで、結局再びマティスの手を借りることになった。

はしたない格好を見せるのは恥ずかしいが、一人ではどうにもならない。それに先ほどの反応を見るに、マティスは自分のことなどなんとも思っていないだろう。

「マティス、お願いね」

「はい、では失礼します」

儀礼についての処理を終えて戻ってきたマティスに声をかけると、あっさりと承諾された。素早い手つきで触れられて一瞬息を詰めたが、平静を取り繕う。マティスは淡々とした声で聞いてきた。

「ローテローゼさま、どうですか？」

「もうちよつと、きつくて大丈夫よ」

「はい、では失礼をして……」

ぐ、と強く布を巻かれれば、なだらかな曲線を描いていた胸元が平坦になる。詰めていた息を吐き出して、ローテローゼは上着のボタンを前で留めた。

「こ、こうして着てみると、結構苦しいわ。息がでない」

「それはいけません。では、ほんのちよつと、緩めますね」

マティスがてきばきと巻き具合を調整し、王の衣装を着せていく。

「どうかしら、なんとかなった……かしら？ お兄さまに見える？」

「はい。着崩れしないうちにバルコニーへ出しましょう。宰相を呼んできます」

マティスは、凛々しく挨拶をして退出していった。

（うん、本当に意識していたのはわたしだけみたいね……）

その背を見送り、ローテローゼは苦笑しながら、ぴんと背筋を伸ばした。

「えっと、お兄さまはこう……背筋を伸ばして、首も伸ばす感じよね」  
少し足も開いて、遠くを見つめる。

ベルナルに扮したローテローゼがバルコニーに立つと、集まった民がどつと沸いた。その迫力に圧されて思わず後退ったローテローゼの背中を、マティスがそつと支える。

集まった人々は、バルコニーに国王の姿を認めて口々に万歳、万歳、と叫んだ。

赤やピンク、黄色の薔薇の花びらが鮮やかに舞い散る。国民たちがフラワーシャワーのように花びらを投げているのだ。

「こ、こんなに……」

「新国王陛下は、民にそれだけ期待されているのですな」  
にこやかに微笑みながら宰相が告げる。

「この時期に、民の期待を裏切ってはなりません。さあ、手をお振りください……陛下」

頷いたローテローゼは、兄の仕草を思い出しながら手を挙げて左右を眺める。

見事に人・人・人である。だがつい、いつものように手を胸元で小さく振ってしまう。

素早くマティスが耳元で囁いた。

「もう少し大きくお振りください。ベルナルさまは、ぶんぶんと音がしそうなほど元気よくお振

りになります」

「は、はい」

手を振りながらも、衣装のサイズが合っていないことがバレたり、胸の潰し具合が甘かったりすることがわかるのではないか——そもそもいつもなら二階の執務室から手を振るのに五階の会議室のバルコニーに出ていることを疑問に思われないか——そんな不安が胸をよぎり、ローテローゼはひやひやしていた。

「あ、ああ、心配……宰相、大丈夫よね」

「はい。ローテローゼさま、笑顔を振りまいてください。ベルナルさまはいつも鬱陶しいほどに笑顔ですから」

「そ、そうだったわね……鬱陶しいってなかなかはっきり言うわね」  
「事実にごさいます」

宰相の言葉に思わずローテローゼが噴き出した。隣に立つマティスを見れば、マティスも顔を背けて小さく笑っている。あら珍しい、と一瞬思ったもの——

「マティス、今は笑っちゃダメなタイミングよね」

「い、いえ、構わないと思いますよ」

ただ、この笑みは良い方向に働いたようだ。

ローテローゼ——国王の笑顔を見て、さらに歓声が沸き上がる。

それがおさまるのを見届けて、三人はバルコニーから室内へ戻る。

そして窓にきつちりカーテンを引いたあとで、いっせいに大きなため息を吐いた。

「はああ……終わった」

マティスが呟いてローテローゼが頷く。一瞬、部屋に静寂が満ちた。

「なんとかかりましたな……ローテローゼさま、お見事でした」

よかつた、と、ローテローゼは床に座り込む。

「今頃、足が震えてきちゃった。汗もかいてしまったわ」

胸元に余計な布を巻き付けているぶん、暑いし重たいのだ。ローテローゼは自分の胸元を見て、肩を落とした。これからしばらくの間、毎日この布を巻かなければならないと思うと気が重い。

もういつそのこと、とローテローゼは顔を上げた。

「いっそ朝起きてからずっと男装していればいいのよ！ ね、宰相」

それはどうでしょう、と、宰相が首を傾げた。

「戴冠式前にして王の妹君のお姿が理由もなく消えるのは不自然にございましょう。ローテローゼさまとしてお姿を見せることも必要かと……」

ああ、そうよね、と、ローテローゼががっかりする。

そこへ、宰相がさらに言葉を継いだ。

「戴冠式当日は、何か然るべきご欠席の理由を探さなくてはなりません、今日明日は少なくとも一人二役をお願いすることになるかと」

その言葉に、ローテローゼが顔を上げる。

「今、一人二役……って言った？」

「はこ」

ローテローゼの顔が青ざめる。それから視線を上げ、必死に今日のスケジュールを思い出した。高位貴族の女性たちが集まる晩餐会の予定だ。

「ええっと……つまり、午後にはローテローゼに戻らなくちゃいけないわね」

「左様でございます」

「お兄さま不在の理由はどうしましょう？ 晩餐会は女性参加者同士の交流が目的だから、お兄さま不在でも構わないと思うけれど……」

ローテローゼの言葉に、宰相が答える。

「そうですね、戴冠式前なので神殿に籠っている、とでも申せばよいでしょう」

「神殿を確認する者はいないとは思うけれど……念のため、誰か信頼のおける人物を、影武者として神殿に派遣できるかしら？ 背格好が似てればいいわ」

「はい。マティスとともに、騎士団の中から口が堅くてベルナルさまに似た背格好の者を選んでおきましょう」

「お願いね」

「では私は、宮廷騎士として影武者とともに神殿に籠りましょうか。その方がもっともらしい」

今までベルナルのふりをするローテローゼにマティスが付き添っていたのも、そのためだった。ローテローゼは頷きかけたが、宰相が手を上げた。

「待つてくれマティス。多少不自然かもしれないが、お前はできる限りローテローゼさまのお側に。この上ローテローゼさまの身に何かあつては一大事ゆえ——」

一同の脳裏をよぎったのは、先代を襲った暗殺者の件だ。取り押さえられた男はその場で自害してしまったため、黒幕がはつきりしないままだ。

それ以降王族に刃を向けた者はいないが、なんとなく王都の警戒は強まっている。

命の危機が自分にも及ぶかもしれない。そう思うと、体温が少し下がったように感じた。

俯きかけた顎を引き、ローテローゼはマティスを見上げる。

「マティス、わたしの警護、よろしくお願いします……」

「はい。命に代えましても」

マティスが、騎士の正式な礼をとり、また生真面目にそう言う。

そんなマティスの肩を、ローテローゼがそっと叩いた。

「だめよ、マティス。頭を上げて」

「ローテローゼさま？」

マティスの目が不思議そうに揺れる。ローテローゼは慌てて首を横に振った。

「あなたの命はわたしじゃなくて、お兄さまに差し出すものよ。あなたは、王を守護するための騎士なの。命に代えられては困るわ」

ローテローゼにとつて、王女である自分より国王であるベルナルルが優先されるのはごく当たり前の感覚だ。今、ローテローゼはベルナルルの役を務めているが、あくまでも身代わりだ。

今後、ベルナルルが帰ってきた時にマティスがいないと困るのだ。

そう言いながらわずかに己の胸がちくりと痛むのを感じた気がするが、ローテローゼは毅然と言いきった。今は、マティスにきちんと優先順位を伝えなくてはならない。

もちろん、これまで国王の護衛として生きてきたマティスがそれをわからないはずもない。そうローテローゼは思っていたのだが、マティスは困惑した様子だった。

「それはどういうことですか？ わたしは王宮付きの騎士ですから、ローテローゼさまも守りする対象、いえ、そうでなくても、俺はあなたをお守りしたいと思ってるのに！」

「落ち着いて、マティス。簡単な理屈よ。あなたはお兄さまの騎士なのだから身を捧げる相手を間違えてはいけないの。王より優先するものがあつてはいけない」

「そんな……！」

がばつと立ち上がったマティスは、幼馴染で遊び相手だったマティスの顔になつてしまっている。ローテローゼはそのことを微かに嬉しく思いながら、微笑んだ。

「わたしは束の間の身代わりよ。命の重さも、責任の重さも、何もかもが違う。あなたはお兄さまのもの。……それをわたしはお借りするだけ」

「ベルナルルさまも大切だけれど、同じくらい姫のことだって大切に思っています」

姫、と呼ばれてローテローゼは苦笑した。

「何言つてるのよ、王とその妹が同じであるわけがないでしょう。いい？ 王は、何者にも優先される。これからお兄さまを、よろしくね」

ローテローゼは微笑みながら部屋を出ようとした。  
「姫？ どこへ」

「一度部屋に戻ってローテローゼに戻らなきゃ。晩餐会の用意よ。宰相、あとで招待客リストを持ってきてくれる？」

「かしこまりました。国王陛下の執務室にお届けいたします。これマティス、お供を。国王陛下を一人で歩かせるわけにはいかない」

「あ、はいっ」

緋色の絨毯が敷かれた廊下を、ローテローゼはマティスを従えて歩く。

できる限り声をかけられないよう、ローテローゼは視線を落とす。

(いいのよね？ これで……。わたしは本物の王ではないもの)

とはいえ、身代わりを引き受けると宣言したのは自分だ。今更、その選択が正しかったのかどうか、考えている余裕はない。

(……不安がっている場合ではないわね。戴冠式まで、予定がびつしり。ああ、全部をちゃんとやるかしら……。もし、身代わりだとバレたら大変なもの)

歩きなれた廊下が、やたらと長く感じられる。

その緊張に耐えられず、ローテローゼはそっとマティス呼んだ。

「はい、お呼びですか」

「マティス、隣を歩いてくれる？ 足が震えそうなの」

「……承知いたしました」

マティスは咄嗟に手にしていた書類を一部ローテローゼに持たせると、すっとその隣に並んだ。

「これなら、相談しながら歩いているように見えるかと」

「ありがとう、マティス」

「しかし……人とすれ違うたびに、どきっとしますね」

「ええ、秘密を抱えるって……思った以上に大変……」

ふいに、ローテローゼが視線を上げた。

「……マティス、お兄さまのお部屋より、わたしの部屋の方が近いわ。入りましょう」

「え？」

「ドキドキすぎて、倒れてしまいそうよ」

「ではそちらに——」

周囲を見回して誰もいないことを確認し、素早く二人でローテローゼの部屋に入る。扉に鍵をかけて、ローテローゼは座り込む。マティスは廊下の気配を探り、異変がないことを確認している。

「はーっ……身代わりって大変ね……」

「本当に……思いのほか緊張しましたね」

「ほんとね。ドキドキしちゃったわ。マティスと一緒によかった。ひとりだったら、絶対廊下を全力で走ってしまったもの」

なぜか笑いが込み上げてきて、ローテローゼはくすくす笑う。

「マティス、よくわからないけど、大丈夫って気がしてきたわ」

「はい、ローテローゼさまは、昔からいざという時の度胸はおありですからね」  
そう言われて、ローテローゼは目を瞬かせた。

マティスがくすくすと笑っている姿に、どきりとする。さつきまで生真面目な騎士の顔だったくせに、今ではすっかり幼馴染の表情だ。

目を丸くすると、マティスの手がそっとローテローゼの髪を撫でた。

「そういうところは、本当」可愛らしい」

「あ、あの、マティス？」

それどころか突然顎を掬われ、マティスの顔が近づいてくる。

仰け反る間もなく、体を長い腕で絡めとられた。

「――姫」

「は、はい！」

いったい何を言われるのか、と、ローテローゼは身構えた。間近で見るマティスの顔は、記憶の中にあるものよりもずっと整っていた。

銀の髪は細くさらさらと流れ、切れ長の黒い瞳に吸い込まれそうだ。

（あら、マティスってこんなカッコよかったのね……）

そんな言葉が脳裏をよぎり、慌ててローテローゼは打ち消した。マティスはそんなローテローゼ

をしばらく見つめていたが、やがて細く息を吐き出して微笑んだ。

「ご心労も多いことでしょうが、頑張りましょう」

その顔はすっかり護衛騎士のものに戻っている。ローテローゼは息を吐き出した。

それが安堵によるものか、残念だからなのかはもうわからなかった。

そして、このあとのローテローゼの動きを確認したあと、マティスは出て行った。

晩餐会までには準備を整えなくては、とローテローゼは立ち上がり、どのドレスを着ようかと思案し始めた。

その翌日、ローテローゼは、のろのろとベッドから体を起こした。

「ちゃんと寝られなかったわ……」

うとうととしては目を覚まし、再び寝ては妙な夢を見る――そんなことを、夜通し何度も繰り返した気がする。頭が微かに痛み、体は重たい。

晩餐会では『ローテローゼ』として普通に過ごすことができたが、頭の中はずっとぐちゃぐちゃのままだ。

窓にかかった淡いピンクのカーテンを開くと、まだあたりは薄暗かった。

相当早朝に起きてしまったらしい。それならば――と手早く身だしなみを整えて、部屋の隅に置いてある籠をひとつ手にすると、中庭へと降りた。

「やっぱりドレスが良いわね」

男装すると、服と一緒に国王としての責任もその身に背負うことになる。それがローテローゼにはひどく重たい。ドレス姿に戻れば、気楽な王の妹に戻れてホッとす。

目指したのは、中庭を突っ切った先にある薔薇園だ。

王宮内でローテローゼが好きな場所の一つである。幼い頃、兄と喧嘩するたびに逃げ込んだ場所であり、拾った宝物をこっそり隠す場所でもあった。

「今日も綺麗に咲いてるわね」

朝露に濡れた薔薇を摘む。

自分の部屋や兄の部屋、城の入り口に飾るには何色がいいだろうか。

「あ、そうだわ。薔薇のジャムを作りましょう」

マフィンにつけても美味しいし、紅茶に溶かしても美味しい。

ばちん、ばちん、と、花ばさみが軽快に鳴る。

早朝に薔薇を愛するのは、ローテローゼがいつだつてやってきたことだ。

そうするうちに、悩みはいつもほどけていく。

しかし、今日のローテローゼの顔は曇ったままだった。

兄はいつだどこへ行つたのか。なぜ、アナスタシアは兄の暴挙を諫めることなく同道したのか。そもそもなぜ、二人の結婚は許されなかったのか。

そんな疑問ばかりが渦巻いていく。

「そもそも、駆け落ちするほどに愛されるなんて羨ましい——とか思うわけないでしょう！」

ふと唇からそんな言葉がこぼれて、慌ててローテローゼは打ち消した。

戴冠式目前に逃げ出すとは、とんでもない国王である。

国王失格、王族失格だ。

「帰ってきたら、きつくお仕置きをしなくてはね」

籠いっぱいになった薔薇の花を見て、ローテローゼはそう呟く。

ようやく朝日が薔薇園全体を照らし、人々が活動し始めた気配がそこかしこでする。

「思いのほか時間が経ってしまったわ。急いで戻らなくちゃ」

今日も一日、忙しくなるはずだ。昨日、晩餐会のあとで宰相から渡された紙には、国王としてのスケジュールがびつしり書いてあった。

マティスや宰相の協力を得ながらこなさないと——そう思いながら足早に厨房へ行つて薔薇を預け、自室へ戻る。ローテローゼは、ふうつとため息を吐いて長椅子に腰かけた。

そこには兄のクローゼットから持ってきた服がたんでおいてある。

マティスが来る前に、男装を完了させておかなければならない。

一人でものごく苦勞しながらなんとか胸を潰し、シャツの袖や裾を調節し、ようやくと男装が完了する。

「よし——」

髪をぎゅつと結んで、宰相がどこから見つけてきてくれた髪かみをつける。

鏡を見ると、その中にいたのは、凛々しい青年王の姿だった。

「髪型が違うだけで、雰囲気がいぶん変わるわね」

メイドに頼むわけにもいかず、メイクで眉の太さや唇の色を調整するのも自分で行う。それから、ローテローゼは部屋を出た。

午前中の予定を確認しながら、廊下を足早に歩く。

途中で何人ものメイドや衛兵にすれ違ったが、手を挙げて挨拶をするにとどめる。

王の私室へ滑り込むと、既にそこにはマティスがいた。

「おはようございます、陛下」

その眉がキリリと吊り上がっているのを見て、ローテローゼは目を瞬かせた。

「おはよう……って、どうしてそんなに怒ってるの？」

「よろしいですか、私は陛下の警護をする立場です。行先を告げずに部屋から消えるのはやめてください。私でなくとも心配します」

あ、と、ローテローゼは口を押さえた。

聞けば、早朝の時点でマティスはローテローゼを迎えに来てくれていたそうだ。

しかし、薔薇を摘みに出たことで行き違ってしまった、ということらしい。

「そうよね。あなたがずつとついてくれることをすっかり忘れていたわ。ごめんなさい。目が覚めて、薔薇が綺麗だったから、つい……いつもと同じように行動してしまったの」

胸元で手を合わせてごめんなさいと繰り返すローテローゼに、マティスが緩く首を振る。

それからざつとローテローゼの身体に目を走らせて、ぴたりと視線を留めた。

「……それに、陛下。胸元が緩んでいます」

「え？」

「失礼ながら……胸の潰し方が甘いかと……」

指摘されて、慌てて己の胸元を見る。確かに、昨日のようにべったんこ……ではない。

「どうしよう、マティス！ 謁見まで時間がないわ」

少し迷った様子のマティスが、ローテローゼの腕をそつと掴んで部屋の端へ向かった。衝立も置いて、扉がいきなり開いても視界に入らないようにする。 ついたて

「脱いでいただけますか」

「え、えええ、すべて!？」

「ち、違います、布を巻きなおすのでシャツを脱いでください、ということですよ」

そうよね、と、ローテローゼは早鐘を打ち出した己の心臓を宥めながら、シャツを脱ぐ。

だらん、と胸に巻いていた布が落ちてきて、慌ててマティスがそれを掴んだ。

「はい、息を止めて！」

「ん！」

ぎゅぎゅつと布を巻かれて「苦しい」と訴えたがマティスは「我慢ですよ！」と呟いて、シャツを着せてくれる。迅速に対応を済ませると、マティスがふと微笑んだ。

「はい、これで大丈夫です。急いで謁見の間へ参りましょう」

「……はあい」

(本当に、うん、妹程度なんでしょうね……)

身体に触れているというのに、あっさりとそう解放された。三度目ともなると、ローテローゼにも落ち着きが生まれていた。

ベルナルとしての格好を整え、マティスと向かったのは謁見の間だ。

通いなれた場所ではあるが、玉座に腰かけたことはない。それに、王女はほとんど正式な政治の場に姿を現さないため、朝議への参加もはじめてである。

国王用の入り口を通り、広い部屋の中でローテローゼはため息を吐いた。

幸い、というべきか謁見の間は、城ができた当時からそのままの姿をとどめている。

玉座は階段を何段も登った高い位置にあり、さらに玉座の前には視界を遮るための布が下げられていて、王の姿は臣下からはほとんど見えない。

「昔は権威を示すために、このように高い位置に王は居るものだった——と習ったわ」

「そのようになっていく国も、まだまだ多いみたいですよ」

「姿が隠せても声でローテローゼだとバレてしまうわね。高官ばかりだから、いいのかしら？」

「ご安心ください。本日から戴冠式が終わるまで、朝晩の挨拶と朝議の類はできるだけ簡略化するとすでに諸官に伝えてあります。陛下は我々に合図さえお送りいただければ」

その言葉に、ローテローゼはほっとして微笑んだ。

「よかった、それならなんとか『身代わり国王』が務まりそう」

背筋を伸ばして玉座に座ったローテローゼは——『王の顔』になっていた。

やがて、高官たちが入室してくる。

朝議と謁見の一切を取り仕切るのは、宰相だ。

彼は、そこで高らかに宣言した。

「ベルナルさまの戴冠式は厳正なる占いにより、古式ゆかしい形式へ変更されることとなった」  
あまりにも突然な発表に、重臣たちがどよめく。

「占いごときでそのような重大な内容を決めるとはどういうことか！」

一人が甲高い声で叫んだ。ローテローゼの位置からは顔がよく見えないが、立ち位置としては外務大臣がいる場所からだ。異国との付き合いが広い人物である。

ハラハラしていると、宰相がさらりとその反発に答えた。

「大臣、占いごとき、とは聞き捨てなりませんな」

「な、なんだと?」

「我が王族には代々、然るべき血筋の占い師がおりますぞ。その占いが信じられぬと仰せか」

「でたらめを言うな。どこにそのような占い師がいるのか!」

我が家ですな、と、手を挙げたのは元老院議長のポンペイウスだった。宰相も、うむ、と頷いているところを見ると、二人の間では相談済みのことなのだろう。

「わしが若かりし頃、先王と王妃のお傍で頻繁に占いをしたのを覚えておいででしょうか」

先王の正妃には、ひそかに想いを寄せた相手があった。

それが当時のお抱え占い師、美男で大変よく当たる占い師だったというのは公然の秘密である。

はなから叶わぬ恋ゆえ二人は想いを告げることも、互いの体に触れることもなかったという。

「う、占い、さようでしたな、結構。承知……」  
うむ、と宰相が大きく頷いた。

朝議はそのあとも、淡々と進んでいく。マティスの言っていたように、基本的には宰相がカバーしてくれるようで、ローテローゼの発言はほとんど必要なかった。

しかし、マティスの動きが、ふいにぴたりと止まったことにローテローゼは気がついた。  
「マティス？」

その視線を追って視線を動かせば、先ほど声を上げた外務大臣が再び声を上げていた。

「宰相殿、国王陛下のご結婚はどうなりましたかな？ 先方が返事を待っておるのですぞ」

その声に、宰相がゆったりと答える。

「おお、そうであった。イーヴニール王国の姫君でしたな」

「宰相、ちと暢気すぎますぞ。かの国は大国、よしみを結んでおいて損はございません。早速この縁談、進めましょう」

その物言いに剣呑なものを感じて、ローテローゼは息を止めた。王族の婚姻は、もちろん国の結びつきを大切にするが、一大臣が気軽に意見を上奏してよいものだっただろうか。

ローテローゼが戸惑う中、さらに外務大臣は言葉を続けた。

「そして宰相、陛下にお子が生まれた場合、王位継承権はどうなりますかな？」

「王の第一子が王位継承権第一位、第二子をご誕生の暁にはそのお子が第二位となります。もちろん、

ん、ローテローゼさまの継承権は消えませんが……、国王のお子さま方の次の順位となりますな」

淀みない宰相の言葉に、一瞬外務大臣の言葉が止まる。

それから、低い声が謁見の間に響いた。

「……ではやはり、ローテローゼさまには継承権の放棄宣言か、継承権の統一をしていただく必要がありますな」

聞き慣れない言葉に、ローテローゼは目を見開いた。

宰相も少々焦ったように言葉を紡ぐ。

「ローテローゼさまが玉座を狙う、とでも？」

「さよう。ただのきょうだいなら心配はせぬ。しかしお二人は双子。片割れが王になるのに、何故なにゆえ己は玉座に座れぬのかとお思になれば、一大事ですぞ。争いになる前に、継承権を取り上げてしまわねは」

ローテローゼは絶句した。

いまだかつて玉座を望んだことなど、一度もない。幼い頃から王となるのは兄であって、自分はその兄を助けるものだと思っていた。

ローテローゼはマティスを見た。やはりマティスも苦い顔つきになっている。

「ローテローゼさまがこうして身代わりになって玉座に座っていることを、大臣たちに知られてはなりませんね」

「そのようね」

そのあと、朝議は解散となり、ローテローゼとマティスは重い足取りで王の執務室へと移動した。

「それにしてもマティス、継承権の統一ってどういうこと？」

執務室に入るなり、ローテローゼはそう聞いた。家庭教師から大抵のことは習っていたが、そのようなことは初耳だった。

マティスの表情が硬くなる。

「簡単に言いますね。ベルナルさまとローテローゼさまがご結婚なさることです」

「へ!？」

「我が国には、王の伴侶に継承権があつてはいけないという条文がありますので、王の伴侶となれば、ローテローゼさまの継承権は消失します。そのうえで陛下のお子を産みになれば、その子は間違いなく王位継承権第一位になる……ということですよ」

ローテローゼは目を見開いた。

「そんな……。それは、わたしがお兄さまの子を産むということ……?」

「いえ、昔はごきょうだいでお子をなしたようですが、今ではさすがにそれは行いません。形式的に夫婦になったあと、陛下はご側室との間に御子をもうけ、その子を国王といたします。王妃さまは――」

その後の言葉は聞きたくもなくて、ローテローゼは手で制した。

つまり、もしも継承権の統一を行うなどとなれば、アナスタシアは側室にしかねらず、ローテ

ローゼは望んだ相手と結婚することができなくなるということだ。

(なんてこと……。それは悲劇でしかないわ……)

誰も幸せになれない。思わず唇を噛んで俯いてしまう。

マティスはそれでも淡々と言葉を続けた。

「ベルナルさまがどうして駆け落ちをなさったのかと思いましたが、おそらく外務大臣の思惑にお気づきだったのでしょう。王族は離婚が認められない。愛する人とさっさと結婚してしまえばとりあえずはこちらのもの、ですから」

ローテローゼは、大きなため息を落とした。

「――頭が痛いわ。理屈ではわかってても」

「でしょうね、と、マティスも苦笑する。

「……駆け落ち以外に……手段はなかったのかしらお兄さま……」

なさそうですね、とマティスの吐息まじりの声が落ちてくる。

「縁談をかなり強引に進めようとしているものね……」

「は、」

ローテローゼは息を吐き出し、ふと、マティスを見上げた。

今自分が少しでも冷静でいられるのは、マティスあつてのことだった。もともと、頼りになる存在ではあったが、それは剣の腕が立つから、という意味だけだ。

(今は……マティスがいてくれるだけで、心強いわ)

兄の駆け落ち騒動がなければ、マティスがこんなに頼もしい存在だとは気付かなかっただろうし、傍に居てほしいと願わなかつただろう。

「……わたし、将来は誰と結婚するのかしらね……」

思わぬ言葉が口について飛び出し、ローテローゼ自身がびっくりした。マティスも、目を丸くして「ローテローゼさま？」と言う。慌ててローテローゼは首を横に振った。

「ごめんなさい、忘れてちようだい。わたしはお兄さまとアナスタシアが戻ってくるまで、身代わりを頑張るわ」

羽根ペンを手にして、脇に積み上げられた書類を手に取る。

「さ——マティス、これの説明をお願い」

「はい」

それからローテローゼは黙々と執務をこなした。そうすることで、なんとか平常心を保っていたと言つてもいい。何かしていないと、心がバランスを崩してしまいそうだった。

数時間が経った頃、ローテローゼの後ろから声がかかった。

「陛下、少し休憩なさつては？」

「……そこに置いてくれる？」

ローテローゼが顔も上げずに言うのと、再びマティスの声がした。

「いえ、置くスペースがありません。こちらの丸テーブルまで陛下にご足労ただかねば」

え、と顔を上げると、丸テーブルが部屋の隅にわざわざ設置されていた。

その上には、紅茶のポットとティーカップがきちんと置かれている。

目を丸くするローテローゼを見て、マティスがニコニコ笑っていた。

「さ、陛下こちらへ。召し上がってください。適切な休憩も必要です」

「……はい、そうするわ」

苦笑しつつ立ち上がると、マティスがエスコートをするようにローテローゼの手の下から手を添える。丈の長い服を着ているせいも、余計にマティスの手が大きく見えた。

ローテローゼの心臓がとくとくと跳ねる。

そのまま手を繋いでティーセットのところまで導かれ、ローテローゼは席に着いた。

マティスが器用に紅茶を注いでくれる。

一口啜つて、ローテローゼは美味しい、と頬を緩めた。

マティスはほっとしたように表情を緩める。

「……ローテローゼさま。ベルナルルさまの身代わりを務めてくださっていることには感謝いたします。でも、姫らしさを失う必要はございませんから」

その言葉がじんわりと胸にしみ込んでいく。「ありがとう」と囁くと、マティスは胸に手を当てて、いつも通り生真面目に頷いた。

——それから数時間。再び執務室で書類と格闘するローテローゼの元へ、宰相がやってきた。大荷物を抱えて入室してきた宰相の後ろに、もう一人いる。

咄嗟にマティスが「誰だ」と言いながら腰の剣に手をやったが、宰相が目線で制した。

「落ち着きなさい、マティス。ポンペイウス閣下だ」

「はっ、失礼いたしました」

ローテローゼは内心驚く。

元老院議長——つまりはアナスタシアの祖父だ。一昨日までは健康的な老翁だったのに、今は見る影もなくやつれてしまっていた。その表情が心労の大きさを物語っている。

深々と一礼してローテローゼの傍へやってきた彼も、大荷物を持っていた。

「その大荷物は、なんでしょう？」

「戴冠式のお衣装です。元老院の蔵に押し込められていたものを発掘いたしました。古式ゆかしい伝統衣装です。長らく仕舞いっぱなしでしたので、虫干しを致しませんでした……」

手伝います、と言いながらマティスが荷物を受け取り、手際よく衣装を並べる。けほ、と、誰かが噎せた。

「なるほど黴と埃の匂いがあるな……このままではとても着れたものではないでしょう」  
眉を寄せた議長が、失礼しますと窓を少し開けた。

外からは、馴染みのある薔薇の芳香が飛び込んできた。

ああ薔薇の香りだ、と、誰もが安堵する。

「議長、そのまましばらく開けておいて」

「陛下、承知いたしました」

「書類を飛ばさないように気を付けなくちゃ……」

ローテローゼは散らばっていた書類を手早く片付ける。

「虫干し、わたしも手伝うわ」

につこり笑って立ち上がったローテローゼは、ドレス姿ではなく国王の私服を着ている。髪を首の後ろで一つに束ね、ヘアアクセサリの類もない。パツと見たところ国王に見える。

だが、シャツの袖を捲った腕は白く細いし、だいたいにおいて動きが大人しく柔らかいため、王をよく知る人物なら違和感を覚えるだろう。

その姿をじっくり眺め、宰相はわずかに息を吐くと呟いた。

「ローテローゼさま、今宵あたりからいよいよ謁見、出迎え、夜会、と人前に行事が増えて参りますな……」

「ええ。こればかりは避けられないわ」

「左様ですな……」

ここまでは、なんのканのと理由をつけて部屋に引き籠っていられたが、外国や国内の要人相手となるとそれも言っていられない。

そこまで考えてから、ローテローゼはハツとした。

「お兄さまの外交の場に行き同行していたから、公的な話題にはついていけるけれど……」

例えば私的な書簡のやりとりをしているとか、ゆっくり歓談をする約束があるとか、私的なものとなるとついていけない。

なぜ思い当たらなかったのかしら、と思いつつローテローゼは指示を飛ばした。

「マティス、お兄さまの私的な書簡や日記がしまつてある場所を調べてくれないかしら。お兄さまのことだから、特記事項を、わかりやすくまとめているかもしれない」

承知いたしました、と、マティスは頷く。

それにホツとして領り返してから、ローテローゼは元老院議長を見上げた。

「そういえば、お兄さまとアナスタシアの駆け落ち先はわかったの？」

「それが……ヴィーノルツツ州へ向かう道を通じたということしかわかつておりません」

「ヴィーノルツツ？ 隣国との国境よね。国境を越えたのかしら？」

ローテローゼが手を止めた。

国王が勝手に国を出たとすれば、少々話が変わってくる。

元老院議長もやつれた顔をさらに青くした。

「さすがに国を出たということは……ないとは思いますが……」

「そうよねえ。仮にも国王が、通行手形も持たずに国を出ることはないわよね……」

「と、思いたいですなあ……」

いかんせん駆け落ちですから、と、宰相もどこか歯切れが悪い。

他国へ駆け込まれたら、連れ戻すのは困難になる。うっかり兵を差し向ければ戦になりかねず、要人を送り込むには先方の了解が要る。

それにしてもなぜ国境へ？ と、首を傾げたローテローゼはぼん！ と手を叩いた。

「そうよ！ 国境の町、ロウサンテに向かったのよ！ そこに違いないわ」

「ローテローゼさま？」

「あのね、その町は——結婚するために親の承諾や許可書がいらない唯一の場所よ。ある意味、貴族の令嬢たち憧れの土地よ！」

あ、と、男たちも頷いた。

そこは、現在はノワゼット王国の領土ではあるが、隣国サンテンス王国、ファヌ国、スカラー国の国境が複雑に入り組んだ場所にある町だ。今まで、その所有権や国境を巡っての争いが絶えたことがないというのは、この国の王族であれば誰もが知っている。

先々代のノワゼット国王が力業でノワゼットの支配下に置いたものの、四つの国の文化や法律が入り乱れているため一種の自治区となっているのだ。

「さっそく、追手を差し向けます」

元老院議長が慌ただしく部屋を出ていった。

「……二人が、無事に見つかるのと良いのだけれど……」

ローテローゼが苦笑して、それからの準備に取り掛かった。

\*\*\*

さてその日、身代わり国王は大忙しだった。

宰相とマティスのサポートがついているものの、スマートな執務とは言い難く、右へばたばた、

左へおろおろといった有様で、ローテローゼに戻る暇など全くない。

「陛下！ 陛下はどちらに！」

マティスも常に慌てた様子で走っている。いつもはきちんと整えられている銀の髪が激しく乱れているし、そもそも城の廊下を走るのはあまり褒められたことではないが、誰も咎める者はいない。なぜなら行き交う人は、兵士から女官長から大臣に至るまで全員走っているからだ。

「マティスさま！」

背後から呼びかけられ、マティスは足を緩めた。

「ん、なんだ？」

「陛下の私室に大至急来てほしいと」

まだあどけない表情の少女がマティスと並んで走りながら、少し緊張気味に伝えてくる。

「ありがとうございます。えーっと君、名前は」

「侍女見習いのカタリナと申します」

そんな茶髪の少女の利発そうな様子を見て、マティスが微笑む。

それから手にしていた書類をそっと彼女に差し出した。

「ではカタリナ。ついぞと言つては悪いんだけど、後宮付き女官長にこの書類を届けてくれるか？  
そして女官長の返書を、私か宰相に渡してほしい。大事な書類だから責任をもって頼む」

その言葉に、カタリナは緊張した面持ちになったが深々と頭を下げて後宮へと走り出した。

その時にはマティスも反対側へ走り出していた。

たどり着いた国王の私室を慌ただしくノックする。

「陛下、失礼します」

しかし返事はない。素早く周囲を見回して、室内へ滑り込む。

「陛下？」

ひょい、と、無造作に衝立の影を覗き込んだマティスは慌てた。

「ししし失礼いたしました！」

布を巻きなおしていたローテローゼがいたのだ。

「マ、マティス。早かったわね。一緒に見てほしい書類があるのだけど……」

ローテローゼが若干上ずった声で言う。マティスは慌てて答えた。

「はい。承知いたしました。えーっとそれから……正門に一日早くファヌ国の大使がご到着のとこのです。お急ぎください」

「えー！」

顔を出したローテローゼが絶望的な表情になっているのを見て、マティスは「無理もない」と脳内で呟いた。

つい一時間ほど前に、隣国サンテンス王国の国王夫妻が戴冠式の参列のために到着したのだ。

こちらは定刻通り、なんの滞りもなく客殿へとお通り頂けた。

ローテローゼが作法通りに客殿に挨拶に赴くと、大国の国王夫婦は庭の薔薇園を眺めていた。

「見事な薔薇園ですわね。わたくし、薔薇が大好きですの」

サンテンス王妃が嬉しそうに言う。その手には、到着の折にマティスが渡した薔薇の花束がある。そこへ宰相がすつと進み出て、「お持ち帰りいただけるよう、数株、庭師に用意させてごさいませ」と、すつなく告げる。

本来は、このやりとりも王がするものであるが——喋れば女であることがバレてしまうので、やむなく宰相に任せている。

そこで、老練なサンテンス国王がふとローテローゼを見た。正確に言えば、ベルナルルに扮したローテローゼを。ほんの一瞬、彼の目が細められるのを見て、ノワゼット王国側は一斉に緊張した。しかし、さすが大国の王だけあって、その場を乱すような無作法な真似はしなかった。

「これは類まれなる美青年王ですな」

サンテンス国王は新王即位のお祝いを述べると、同時に先代のお見舞いを申し出てくれた。

ベルナルルに扮したローテローゼは、微笑んでマティスに囁いた。

「陛下とは狩猟仲間だと伺っております。父も喜びましょう。——マティス、奥の様子を確認してきてくれる？」

「承知いたしました」

マティスは、ローテローゼの言葉に恭しく頷き、その場を去る。ローテローゼもそれからしばらくの歓談のち、場を離れた。

——そして、今である。

ローテローゼとマティスは視線を合わせると、急いで『国王陛下』と『その側近騎士』として

フアヌ国の大使たちの前に現れる。

今度はバレないように、とマティスが前に出るのは忘れない。

結局、ローテローゼが国王の私室へ戻ったのは、月が煌々と庭を照らしている頃だった。

マティスが私室の扉に慎重に鍵をかける音を聞いて、やっと息を吐く。

ようやく国王としての服を脱げると、ローテローゼは室内の長椅子にくったりと座った。

「汗でべたべたよ。お風呂に入りたいわ」

「では、湯を張ります。薔薇を散らしますね。お好きでしょう？」

「ありがとう」

そう答えると、マティスは湯を支度しに風呂場へと向かった。

ローテローゼはぼんやりと窓に視線を向けた。月の光がわずかに部屋に差し込んでいる。

（月だけは何と変わらないわね）

そう内心で呟いた時、こつりと何かが窓に当たる音がした。風の音かと思っただが、不安な気持ちが芽生え、ローテローゼは立ち上がった。格好はまだ、ベルナルルのままだ。

「マティス……！」

そう呼ぶとすぐに、マティスが風呂場から飛び出してきた。そしてローテローゼを背に庇い、別の部屋へといざなう。

「ローテローゼさま、こちらへ。私は外の様子を見て参ります」

そう言って、扉を閉められてしまう。

ローテローゼは息を呑んだが、止める暇もなかった。どうか、気のせい——ただの風の音であってほしいと願いながら、服の布地を握り締める。

やがて外から剣呑なマティスの声が聞こえてきた。

「何者！」

鋼と鋼がぶつかる音がしたが、すぐに止んだ。足音が近づいてくる。

ローテローゼは緊張した面持ちで、その足音を待った。

やがて、こつこつとノックの音が響く。扉が開くと、わずかに息の上があったマティスがローテ

ローゼを見つめていた。

安堵と、やはり何かあったのだという緊張が同時に胸に沸き上がる。

「……マティス、何があったの？」

「黒ずくめの男が三人いて、室内を窺っていたようです」

「身代わりだとバレたのかしら？ それとも、国王を狙って——？」

わかりません、と、マティスが言う。怖い、と小さく言うとそのと身体を抱き寄せられて、ロー

テローゼは息を呑んだ。国王用の分厚い布地がなければ、心臓の鼓動がマティスまで届いてしまう

に違いなかった。

しかし、マティスはいつも通りの表情で、淡々と言った。

「戴冠式が終わるまで、夜も男装の方がいいかもしれませんね」

その具体的な案に、ローテローゼは苦笑し、それから恥を忍んで言った。

「——そうするわ。あの、マティス」

「はい？」

「お願いがあるのだけれど……」

「なんでしょう？」

\*\*\*

マティスは、バスタブに背を向けて自制心を総動員させていた。

襲撃にすっかり怯えてしまったローテローゼが、心配だから入浴中も警護をしてくれと言ったのだ。

「普通は——浴室の外で警護をするものですよ」

「わ、わかってるわよ！ でも、マティスの姿が見えないのは不安なもの！」

「はあ、簡単に死ぬことはありませんよ」

「さっきだってヒヤヒヤしたのよ！ わたしの視界から消えちゃダメ」

浴室の中で待て、と言われたときは、ほんの一瞬喜んでしまった。

だが傷心のローテローゼの声を聞くと、とてもそれどころではない。

温かい湯につかっているはずなのにその声は震えたままだった。

（——どうすれば、彼女をお慰めできるだろう）